



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）は、平成4年4月の設立からこのたび30周年の節目を迎えます。

この間、在外被爆者及び世界各地で発生している放射線被曝事故による被災者の救済のために、各構成機関が密に連携し、活動を続けてくることができたことに対しまして、森崎会長をはじめ関係者の皆様に心から敬意を表しますとともに深く感謝を申し上げます。

さて、今年は原爆投下から77年、東日本大震災による原発事故から11年を迎えます。

NASHIMでは30年の間、ヒバクシャ医療を推進するために、国外から600名を越える被ばく者医療の従事者を受け入るとともに、現地へ専門医師を派遣し、技術支援や医療情報の提供等を行ってきました。

また、小中学校での出前講座の実施や、「漫画で学ぶ長崎原爆」の製作等を通じて、若い世代に学びの機会を提供し、将来の後継者育成に努めてきました。

こうした活動を続けてこられたのも、ひとえにNASHIMを構成する関係機関の皆様が、被ばく医療や放射線障害に関する調査研究に長年取り組んでこられた努力と、人々の健康と命を守ることへの情熱の賜物であると考えております。

このたびの「NASHIM 30周年記念シンポジウム」では、ヒバクシャ医療に関する講演のほか、多くの専門家及び関係者の皆様がお集まりになりますので、放射線に関する様々な知識と経験を共有し、今後のNASHIMの活動と課題について議論を深めることができるものと思います。講演や座談会には、福島県川内村の遠藤村長や長崎大学原爆後障害医療研究所の高村教授がご参加されます。川内村と長崎は、東日本大震災以降、交流を続けており、長崎大学が取り組んでいる「復興子ども教室」では、川内村の子どもたちに原爆資料館や平和公園を見学して原爆の被害や復興の歴史を学んでもらう機会がもたれています。私自身は、遠藤村長と長崎で何度かお会いして話をする機会がありましたし、平成24年には川内村を訪問して、当時の復興状況を直接見ることができました。私が最も尊敬するリーダーの一人です。

本日は川内村の再建に努めてこられました遠藤村長と、被災地支援にご尽力され、東日本大震災・原子力災害伝承館の館長を務められる高村教授から、それぞれの体験に基づいた貴重なお話をしていただけるものと期待しております。

最後になりましたが、30年という長きにわたり、ヒバクシャ医療を通じ、国際貢献を果たされてきた関係機関の皆様方に、被爆地・長崎市の市長として、改めまして、心より感謝を申し上げます。

今後とも、NASHIMの活動が、世界におけるヒバクシャ医療の向上において重要な役割を担い、なお一層発展していくことを祈念いたしまして、私の挨拶といたします。

令和4年2月20日

長崎市長 田上 富久